大地

第　42　号
2013.1.18.発行
浄　國　寺
上越市寺町3丁目14-10
☎025-523-5724

【俳句】

山崎　睦

年新たなれどこの身はこのままで
鏡餅寒九の水に沈めけり
留守の役いただき昼寝ほしいまま
何かして居らねば眠き春炬燵
平凡でありて倖夕端居
仏壇の灯をゆらしけり隙間風

（平成七年　作）

先々号より母の句を載せることにしました。掲載の俳句は、母が熱心に通い続けた俳句教室の句集から選び採ったものです。

（隆昌）

巳年でありますが

山崎　隆昌

今年は巳年（み年）へび年ですが、新しい年が、皆様に幸の多い稔り豊かな年となることを願うものです。

巳は十二支の第六位、方角では南々東、時刻では午前十時頃、動物では蛇をいいます。

蛇は動物分類上、爬虫類トカゲ目ヘビ亜目広辞苑には「（略）爬虫類の中で最も特殊な体形を持つ。すなわち体は円筒形で細長く、小鱗で瓦状に覆われ、肢と肢帯がないが、原始的なメクラヘビやボア類には後肢の痕跡がある。舌は細長く、先端は二分（略）」と説明されております。

十二支の動物は、空想の辰（龍）を除けば、私たちに馴染み深い哺乳類がほとんどです。それに酉（鳥）と巳（蛇）の二種が加わります。蛇が何故十支に選ばれたか不勉強の私には全く分りません。（十支の動物についての逸話はいくつか残されていますが）

蛇は一般的に嫌われものです。ものの譬えとして「蛇のような○○○」というときは、多くの場合、執念深いとか、陰険であるとか、不吉なもの等を表します。

おそらく「爬虫類の中で最も特殊な体形を持つ」その外見から、社会的通念として気味が悪い、不吉なものと感じられるのでしょう。中にはマムシやハブ、コブラのような毒蛇もおりますが、大半はおとなしく無害です。

この偏見は蛇族にとって、はなはだ迷惑で、心外なことで、人間社会ならば不当差別と厳しく糾弾されるところかもしれません。

かく言う私も蛇はどうも苦手で、素手で持つことはとてもできませんし、首に巻いて可愛がることなどまっぴらご勘弁の方です。

人は生まれつき「蛇が嫌い」ということではなく、もの心が付き、まわりが見えるに従って、根拠は不明のまま次第に蛇を忌み嫌うようになったのではないでしょうか。

根拠なく「忌み嫌う」ことといえば、友引の葬儀とか仏滅の婚儀などありますが、忌むことについて、詩人の吉野　弘は、漢字遊びシリーズで次のように詠っています

忌むべきものの第一は
己が己がと言う心

これはなかなか厳しいですな。

漢字としては「巳」も「己」も同じ「己の部首」に属しますが。

言葉っておもしろい

山崎慎子

高田に住むようになった当初、心に懸かった言葉がいくつかあった。

極めて共通語に近く、訛りや方言が少ない所ではあるが、他所から来た者に取っては、気になる言葉がいくつかあった。

そういえば、他所から来た人を「旅の人、旅の者」などというのは特徴的な言葉であろう。（尤も、この言い方も今では殆んど聞かなくなっているし、まして若い世代にとっては？かも知れない）

高田の住人になって四十年経っても、未だに自然に話せないのは「おまん（あなた）」「〜だすけ（〜だから）」「せった（言った）」といったあたりである。

逆に、良い言葉だなァと思って、いち早く日常語にしてしまったのは第一に「切ない」である。やたら「切ない」を連発する私に、ある日とうとう実家の兄が言った。

「あのね、切ないなんていう言葉は相当深い言葉なんだから、そんなやたらに遣うような言葉じゃないぞ」

何かにつけ「あゝ切ない」「ふーん、それは切ないネ」を乱発するのが耳障りだったのだろう。

確かにその当時の私の濫用ぶりは、折角の素敵な言葉を、すっかり軽くしていたのだと今にして思う。

兄に指摘されて、いささかの恥ずかしさと思い当たる節で、以後一切ない」という言葉は私の中で密かに封印された。

関東出身で関西暮らしの長い友人と電話をしている時

「くどいてばかりいてゴメンね」と言った時、一瞬絶句した後

「あのー、今なんて言ったの？」

と聞き返された。そしてハタと気が付いた。

「これ方言だったのね。愚痴を言ってごめんね、って言ったの」

そう伝えると、彼女はしきりに面白がっている。〝口説く〟と言えば一般的には、口説き落とす、というように使われるので、それこそ〝旅の人〟にとってはギクリとする表現なのだろう。

ただ愚痴ることをくどくど言うことが当たり前になっている私にとって、愚痴をくどくど言い募るさまを〝口説く〟と言い表すのはなかなか実感を伴うなァ、ということで、こちらはおいそれとはお蔵入りにはできないのである。

野暮を承知で言うならば、国語辞典においても、決して誤りではないのであるからして。

◆春日山町の二ノ宮甚三さんは、十五年以上の厳しい闘病生活のすえ、昨秋十月、七十二歳で命終されました。その間、家を支え、夫の看病に専心された愛妻への手紙が何通か残されましたが、次の手紙もその一通です。

《手紙》

毎日、毎日、ありがとう。ありがとう。こんな姿になってしまって夫の務めも出来ない俺に、お母さんは身一杯の世話、そして一家をきりもりしてくれ本当に大変ありがとう。感謝の気持ちで一杯です。二人とも元気だっら、あれこれと楽しいはずの毎日が、こんな形で残念でならない。本当に申し訳なく思って居ります。でもまだまだこれからです。必ずや良くなって出来ることを一杯するつもりです。時には、痛みにたえかねわがままも出ます。ゆるして下さい。

何と言ってもお母さんがいつも身の回りにいてくれる事は、うれしく、いとしい事です。

すぐに元気が出るとは行きません。これからもお母さんに身回っていただきたい。多忙のあまり体をこわさぬよう、気を付けて頑張って下さい。無理せず休み休み。今は、本当にありがとうとしか言えません。今後も俺をよろしくお願いします。

父 甚三より

いとしのお母さんへ

朝明けの港を出づる船

山崎隆昌

正月に受け取る年賀状は楽しく、お年玉をもらったような心のときめくものがある。

しかしずぼらな私の賀状はいつも遅れ、元旦の配達に間に合ったことがない。

毎年のこと、師走の初めには机の上にスタンバイOKの年賀状が置かれているのだが、何時までもそのままの状態で年末を迎えることになる。

いつの年だったか、こともあろうに一月の中旬を過ぎ間抜けな年賀状を出したことがあった。口の悪い友人がすかさず言ってきた。

「山崎の家では、年賀状は旧正月に合わせて出すのか」

年賀状は、あれこれ考えシコシコとワープロで打つ。私はパソコンが使えないので。

賀状には、明けましておめでとうの挨拶の後に続き「本年も先の見えぬ厳しい年になりますが、よろしくお願いします」と書いた。

これを見た我が家の山の神がのたもうたものだ。

「厳しい年で嫌になってるところへ、改めて厳しい年になりますと言われるとどうかねェ」

小心者の私は、いささか面白くないと感じながらもその通りかも知れぬなぁと思った。

一方、新しい年に向け門の掲示板につぎのように書いた。忸怩たるものを感じながら

君よ
忘れるな
十五年にわたる悲惨な戦争と
何百万という命の犠牲のうえに
いまの日本のあることを

昨年末行われた総選挙で自民党のポスターには、安倍総裁の大写真とともに「日本をとりもどす」というキャッチコピーが記されていた。結果は自民党が大勝した。

はたして日本は何を失い、何をとりもどそうというのだろう。安倍首相は、経済の再生、教育の再生、国防力を強化し「強い日本をとりもどす」と高らかにいうが。そこに、何か肌寒いものを感じる。

また、本堂の黒板には石牟礼道子の詩「花奉る」の一部を写書した。

ただ滅亡の世迫るを待つのみか
こゝにおいて
われらなお
地上にひらく一輪の花の力を念じて合掌す

東日本の大震災の翌月に書かれたという、「春風萌（きざ）すといえども」から始まる三十八行の詩の最後の四行である。

公害水俣の『苦海浄土』を著し、その後も生涯を通じ人間の世の悲しみを問い続ける詩人の、強くてしなやかな姿に頭が下がるのみ。

「先の見えぬ厳しい年」と書いた年賀状には、吉野秀雄の次の歌を添え、自らの励ましとした。

朝明けの港を出づる船見れば
いかしきひかり分けつつぞゆく

※いかしき→おごそか

種々の言葉

山崎慎子

亡き母は折々名言を遺してくれた。

ちょっとした行き違いと、私の粗忽から、金銭がらみのトラブルに巻きこまれそうになった。ともすれば長年培った友情も終わってしまうか、という危惧もあった。

辛い思いに落ちこんでいる時、ふと亡き母の言葉を思い出した。

「お金で解決出来る程の悩みで良かったじゃないの。世の中には、お金でどうにかならないことが多いからね」

目の前が明るくなり、心が軽くなった。

母の遺してくれた言葉を、ひとつひとつ思い出しながら、書き留めていきたいと思う。

ワン公物語③

―蓮のつぶやき―

山崎 蓮（慎子代筆）

アイツは夏のある日突然やってきた。―何だ、コイツは！―私は少なからず驚いた。何も相談などなかったし、余りにも唐突だったのだから。

でも最近、母さん達の様子が少し変だな、とは思っていた。私を呼んでいるのではないのに時折二人の口から―蓮がね――蓮もね―なんて不可解な会話が聞こえていた。いもうとって何のことかな、と思ってもいた。

この家の人達はいつもバタバタと忙しがっているので、私はよく留守番をさせられた。どうせ番犬を期待されている訳でもないし。まァ大半は寝ているようなもので、散歩とごはんさえ約束されていれば、まゝいいか、という訳だ。でも、お婆ちゃんが体調を崩し始めてからは、いよいよ一人の時間が長くなってしまった。

お婆ちゃんが元気な頃は、よく面倒を見て貰った。膝の上は私の恰好の寝椅子だった。「蓮は穏やかな良い子だねぇ」そう言って優しくなでてくれた。

母さん達は、私が寂しく無いように、仲間を作ってやろうと考えたのだった。そして実は私をいとしく思うあまり、もし私が死んでしまったらペットロス症候群に陥らないかとすこしでも緩衝材になる存在が在れば良いと考えたのであるらしい。

そして私がとても良い子で利口だったものだから、やっぱりパグ犬にしようと決めたのだった。

パグ犬なら、みんな私のように性格が良いと思いこんでしまったらしい。ところがどっこい、そうは行かないのだ。

私は〝華（はな）〟と名付けられた小さなその子を見て、コイツは相当なヤンチャに違いないと睨んだ。

だから私は手始めに、教育的指導をやらねばと思い、その子の前ですごんで見せた。

「いいこと、私が先住犬よ、アンタは私を甘くみるんじゃないのよ！」けれどすぐに華は抱き上げられ、同時に「蓮、だめでしょ。小さい子を可愛がってやらなくちゃ」という声が飛んできた。

分かってないなァ、父さんも母さんも。私はただ犬族のルールをこの新入りに教えてやろうと思っただけなのに。獣医の先生にだって言われたはずでしょ。「とにかく先住犬である蓮を先に。全て蓮を先にして下さい」って

こうして7才違いの、にわか姉妹のギクシャクした生活がスタートした。

しかし華はあながちバカな子でもないらしかった。一応は私が姉であることを認めてくれたようだった。

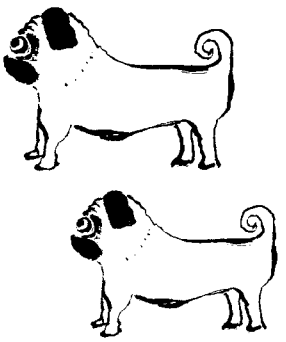
たとえば、華が水を飲み始めた時「ちょっと、私も喉が渇いたから水を飲みたいんだけど」と言うと、華は必ず譲ってくれて、私が飲み終わるのを待っている。

トイレトレーニングも（私と同じで）難なくクリアーしたのだ。

でも、あの子はちょっと行儀が悪い。トイレの時にやたらグルグル廻るのだ。だから折角きれいに敷いてあるシートがグチャグチャになって、余計な所を汚して母さんを嘆かせ時に苛立たせる。

無くて七癖というものなのか、華のそれは大きくなった今でも直りそうにない。あ～あ。

（以下 次号）

※ペットロス症候群

飼い親しんだペットと別れることが原因で、心身に多様な不調が生ずる状態